

2024年4月7日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ 41 「純潔であるために」

レビ18：30、Iコリント6：18～20

問108 第七戒は、何を求めていますか。

答 すべてみだらなことは神に呪われるということ。それゆえ、わたしたちはそれを心から憎み、神聖な結婚生活においてもそれ以外の場合においても、純潔で慎み深く生きるべきである、ということです。

問109 神はこの戒めで、姦淫とそのような汚らわしいこと以外は禁じておられないのですか。

答 わたしたちの体と魂とは共に聖霊の宮です。ですから、この方はわたしたちがそれら二つを、清く聖なるものとして保つことを望んでおられます。それゆえ、あらゆるみだらな行い、態度、言葉、思い、欲望、またおよそ人をそれらに誘うおそれのある事柄を禁じておられるのです。

聖書はこのような性の乱れについて厳しく戒めていると申し上げてよいでしょう。それは命に関わる問題、言わば神さまの領域だからです。性は、生命の誕生、その神秘と深く関わっています。ですから十戒でも、この第七戒は、第六戒「殺してはならない」に続く戒めとして置かれています。それゆえ信仰問答では結婚を「神聖な結婚生活」としているのは注目に値します（問108）。そもそもわたしたちは結婚を神聖なものと理解しているでしょうか。自分たちで勝手に好きになり、自分たちで決めたことだ。単なる人間の営みの一つくらいにしか受け止めていないのではないのでしょうか。

神さまは「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」（創世記2：18）と言われアダムにエバを与えられました。「彼に合う助ける者」はわたしが決めることではない。神さまがお決めになる。その人を人生の伴侶、助け手、パートナーとして神さまが与えられる。だからこそ結婚は神聖なものとなります。そしてそこにお互いに対する敬意というものが生まれてくるのです。信仰問答にある「純潔で慎み深く」という部分の本質がそこにあると思います。結婚の純潔さ、慎み深さ、それは神さまが合わせられた、神さまがその人に合う助ける者として備えられた。そこに敬意が生まれる。ある神学者はそれについて「それはわたしが出会い、共にいる他者の侵すことのできない尊厳に対して抱く敬意、その他者を自分の意のままに扱うことができない、その人の神秘に対する敬意」（E. ブッシュ）と表現しています。神さまが合わせられた人ゆえの尊厳、その人の神秘を結婚生活の中に見るのです。それだけで結婚は十分祝福されたものとなります。

反対にそれが無いところでの結婚ほど危ういものはないと思います。つまりそこでは相手に対する敬意は人間的な資質でしかないからです。良い夫、良い妻であれば辛うじて保てるかもしれない。しかし、わたしたちはいつも良い夫、良い妻であるとは限りません。失敗することも、意見のすれ違いもあるでしょう。そこで相手に幻滅し、思いが冷めたらそれまでなのです。でも信仰はそこに歯止めをかけます。これもある神学者が述べていることですが、「信仰者の家庭も崩れる。わたしたちの中に生きる罪が、何度も何度も共同生活の均衡を失わせる。だが、それでも信仰者の家庭は神の誠実という網の中に落ちる。この家庭は、そのところでしっかりと支えられる」（ド・プリー）信仰はそういうセーフティネットです。夫婦の危機を感じる時に、この神さまが合わせられたという神秘をそこに思い起こすことが何より重要です。

しかし、この神さまの神秘を見失うこと、それによって純潔さ、慎み深さが保てないのが人間の罪の問題であり、そこから救われなければ、結局、人間はこの第七戒の戒めを繰り返す犯し続けることになるでしょう。その罪から救われるためにはイエスさまの救いがどうしても必要になります。ヨハネ福音書8章にあります姦淫の女性の話を思い起こしましょう。イエスさまのところに姦淫の現場で取り押さえられた女性が連れてこられた。姦淫は死罪ですから、現行犯の女性は当然石打ちの刑に処せられることになります。イエスさまはその連れてきた律法学者やファリサイ派の人たちに向かって、「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」と言われました。すると年長者から始まって、一人また一人とその場を立ち去って行った。誰も石を投げる者はいなかったというのです。そしてイエスさまは女性に言われました。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」と。どうしてイエスさまは彼女を罪に定めなかったのでしょうか。それはイエスさまご自身がその姦淫の罪を負って十字架におかかりになられたからです。彼女に代わって死刑をお受けになられたのです。彼女だけではありません。わたしたちも含め全人類の姦淫の罪をイエスさまは背負って下さいました。だからこそわたしたちは赦されました。

マタイ福音書の冒頭に系図があります。ここに数名の女性の名前がありますが、例えば「ラハブ」(1:5)という名前があります。彼女は遊女であったと聖書に記されております。また「ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ」(1:6)とあります。この言葉が示すのは、あのダビデの姦淫の事件であり、そのためにダビデはあまりにも苦しみに満ちた悔い改めをしなければなりません。もちろん聖書はそのことを肯定するために、このような系図を示しているのではありません。この系図に示される人類の数えきれないほどの過ち、姦淫の罪をすべてイエスさまが担われたことを示しています。イエスさまによって、この罪に汚れた系図は神さまの圧倒的な恵みを示す系図となりました。そしてその赦しは、わたしたちをこの恵みに応える生き方へと押し出すに違いありません。イエスさまは三日目によみがえられて、恵みに生きる新しい命を備えて下さいました。わたしたちを聖霊の宮として、神さまの栄光を現す器として用いてくださるのです。この信仰によって、わたしたちの結婚も、すべての生活も整えられていくでしょう。純潔で慎み深く生きる生活がそこから始まります。

天の父よ。あなたが合わせてくださる神聖な結婚という営みをも人間の身勝手な思いからそれを壊してしまいます。けれどもこの罪に汚れたわたしたちを赦して下さるために尊い独り子イエスさまをくださいました。その十字架とよみがえりによって純潔さを取り戻し、真実に愛に生きることができるようになりました。どうぞこの恵みに応えて聖霊の宮として生きることができるよう。主の御名によって祈ります。アーメン。